

Method 1 スケールの音をフルに使ったアルペジオ・パターン

CD Track 59 (Back Track = 60)



ベースがDの音を刻む上で、左手がDm(=レファラ)のコードと、間の音であるミとソも弾く和音を乗せています。この和音はおどろおどろしさが出るので、「GAS」

以外でもよく使っているボーシングです。鍵盤上は白鍵で隣合う形になっているので弾きやすいはず。そして右手は、Dm7の上でAとDのマイナー・ペンタトニック・

スケールを合わせたアルペジオを弾きまくりましょう。6小節目から始まる6連符は、トップ・ノートのオモテ・ウラがずれていくことを意識して演奏してください。

Method 2 手の平で弾いてもOK! 究極のクローズド・ボーシング

CD Track 61 (Back Track = 62)



ベースのコード進行があるパターン。ピアノは音符がたくさん重なっていて、見た目は複雑そうな和音になっていますが、Method 1と同じく隣合った音を弾くボ

ーシングです。トップの音に気を付ければ内声は譜面どおりのボーシングでなくても大丈夫。私は手の平で叩いたりもします。前半4小節、左手はベースとともに

下降しますが、右手は逆に上昇していき、盛り上がりを出しています。後半は両手の和音をクローズド味に弾きつつ、両手とも少しずつ上昇していきましょう。

Method 3 スケールやコード理論に捕らわれない現代音楽的アプローチ

CD Track 63 (Back Track = 64)



これは現代音楽的な、内声を半音でぶつける特殊な和音を要所所々使っています。私が現代音楽を弾いてきて分かったことは、「使っちゃいけない音なんてな

い」ということです。しかし、やはり少々決めごととは作っておきましょう。ここでは、内声を半音でぶつけることと、メロディをきれいに響かせるために、トップ・ノート

だけは半音で重ならないように意識して弾くこと。私はこれを頭で考えず勢いで弾いているので、みなさんもこの譜面をもとに自由な演奏を楽しんでみてください。